

鶴彬の川柳

上田謙二

私は俳句愛好者だが、川柳も好きである。朝日新聞を購入しているが、そこに載る朝日川柳にいつも眼を通していい。

民衆と選挙怖くて延長す

敬虔な仏教国を壊す軍

憲法にみどりにごどもみんな危機

題材は政治。経済。社会。文化等広く多岐に亘っている。また新聞には第一生命保険主催による「サラリーマン川柳コンクール」の優秀句も載る。今年には原材料高や円安による物価高で苦しむ庶民の家計や新型コロナウイルスによる日常生活を詠んだ句が目立つという。応募総数は約八万五千句。優秀百句は第一生命の社員三百人による社内投票で選ぶ。川柳コンクールは今年で三十六回目。今回から応募者や詠まれる内容が多様であることを反映し、サラリーマンという言葉はコンクールから取り「サラッと一句！わたしの川柳コンクール」と改名したとのこと。

ついでいけぬ物価上昇子の会話

円安でドルでくださいおごづかい

そして第一位が、

また値上げ節約生活もう音上げ

これらの優秀句を含む応募作品の内、女性の投稿が四割近くを占めるという。性別や職業に関係なく幅広い応募者から成り立っているのだろう。風刺や批判をユーモラスに表現するのが川柳の真髄であり、読む楽しみでもある。しかしこの川柳を戦前、命がけて創作した川柳作家がいた。

鶴彬つるひなである。鶴に関する著作はいくつかあるが、彼の川柳と人生についてドグマティックな見方を避け簡潔に触れてみたい。

鶴彬は一九〇九年石川県河北郡高松町たかまつに生まれた。本名を喜多きたかずし一二という。鶴は家庭的に恵まれず養父母に育てられた。養父から師範学校進学を拒否され、彼の経営する小さな機織工場で働きながら、劣悪な女子工員の環境に十代で早くもこんな川柳を作っている。

もう綿くずを吸へない肺でクビになる

早熟で才能があつたのだ。養父母の家は小さなアパート

で同居できなかった。そこに見切りをつけ大阪に出る。

一九二七年には東京に居を移しそこで川柳作家の井上剣花^{けんか}坊・信子^{ぼう}夫妻と出会い、働きながら川柳三昧の日々を開始した。そして次第に、

万歳とあげて行った手を大陸へおいて来た手と足をもいだ丸太にしてかへし

などの激越な表現の川柳を発表する。文学作品が激越さを表現すると当然毀誉褒貶も激しくなり、時の権力に警戒される。挙句に鶴は当局の弾圧により獄中死した。

鶴彬が広く知られるようになったのは戦後になってからである。川柳作家一叩人^{いちくちん}こと命尾小太郎がいなければ鶴の事績は現在のような形で残らなかった。また彼に執念に気づく澤地久枝がいなければ一叩人の思いは実らなかった。澤地は、一叩人を小柄で滞洒な老紳士はきわめてものやわらかな人物だが、その意志は鋼の強さを思わせると述懐している。

澤地は図書館で『反戦川柳人鶴彬の記録』を見つけた。全文ガリ版刷りの文庫版で全二巻の全集だった。一叩人の雑誌「川柳東」の別冊となっている。衝撃を受けた澤地

は『反戦川柳作家鶴彬』を書く。続いて私家版で『鶴彬全集』を出す。限定五百部、定価一万六千円と安くはないがさばけるまでに一年もかからなかったという。

その非業の死を含めて、鶴は川柳界の小林多喜二とも言われるが、若くして亡くなったところは石川啄木にも似ている。鶴は小林多喜二も石川啄木も読んでいて二人に共通するものを持って生きた。

鶴彬はその短い生涯の中で八百数十の作品を残しているが、一九二五年十六歳で川柳文壇にその第一歩を記して以来、ひたすら川柳文学に政治や社会との相関性、その中で生きる人間のあるべき姿を追及したと一叩人は評する。そして戦争に徴発され手足を失って帰還した傷兵を詠んだ句「手と足をもいだ丸太にしてかへし」を戦争の悲惨さを訴える革新川柳の始祖に相応しいものとする。更に鶴の作品は表現の幅を広げていく。

高粱の実リへ戦車と靴の鉞

これらの鋭い時事吟を行い、当然官憲に眼を付けられる。そんな状況の中鶴は一九三三年に召集されて金沢の第七連隊に入営した。軍隊でも抵抗を続けその大半を監獄で

過ごしている。札つきの兵だったのだ。この時代を告発する句に、

ざん塚で読む妹を売る手紙

タマ除けを産めよ殖やせよ勲章をやろう

大胆な句である。

澤地の記すところによると、一叩人と鶴は面識はなく、一叩人が戦後川柳を投稿するようになってから知ったという。そして江戸庶民によつて創られ磨かれた古川柳を、政治と文学。経済と文学の合一に高め、鶴は一層川柳にリズムを求めて革新川柳を創始したのである。江戸時代に狂句化した川柳を、正しい姿への復元に努めた井上剣花坊を川柳中興の祖とするならば、鶴彬はまさに革新川柳の始祖なのである。

剣花坊は鶴の師であり盟友だった。八歳で父親を亡くし家庭的に恵まれなかつた鶴にとつて剣花坊・信子夫妻は父と母のような存在だった。剣花坊が亡くなった時鶴は彼を弔う長詩『若き精神を讃へる唄』を遺している。

一叩人は、川柳は大衆に開かれたものであり、且つ感動させるために芸術的であらねばとする。それは単純無味低徊平板な表現とは断じて違うものだと言く。そして諷刺、ユーモア、滑稽は諷刺的ジアンルの文学に自ずと包含され、笑いのエネルギーは川柳に必須のものであるとする。鶴の生きた時代は日中戦争から太平洋戦争へと突き進む暗黒の時代であり、文字通り国民は総動員で戦争へと向かわされた。個人の尊厳や自由は奪われ芸術は窒息させられた。多くの国民が塗炭の苦しみを味わつたのである。

一九三七年(昭和十二)十二月三日、特高により東京野

方署に検挙された鶴彬は、翌年八月留置所で罹患した赤痢の病状悪化によつて、奥多摩病院へ身柄拘束のまま入院。重湯とリンゴ汁しか口にできない病状となり、衰弱の果てに九月十四日に二十九歳で絶命した。小林多喜二と同じ運命を辿つたのである。鶴の思いはいかばかりだったろう。

屍みなパンをくれよと手をひろげ

鶴彬が表現したこの時代社会より、

球春は北越雪譜に記述なく

こう詠める自由で平和な現在の時代社会の方がずっといい。

ウクライナ戦争が続きキナ臭さが漂う今日こんにち専守防衛に
基づく抑止力の強化は分かるが、外交努力も尽くすべきだ
ろう。その上で私たちは思想・信条や言論・表現の自由と
いう人間の基本的権利を守り、決して日本をあゝの戦争の時
代へと逆戻りさせてはならず、平和を追い求めることが大
事なのだ。この頃頓とんに考える。

参考文献

『反戦川柳人鶴彬の獄死』